





カドカワパルズ

昭和五十七年五月二十五日初版発行

著者 泡坂妻夫 あわさかつまお

発行者 角川春樹

喜劇悲奇劇 きげきひきげき

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

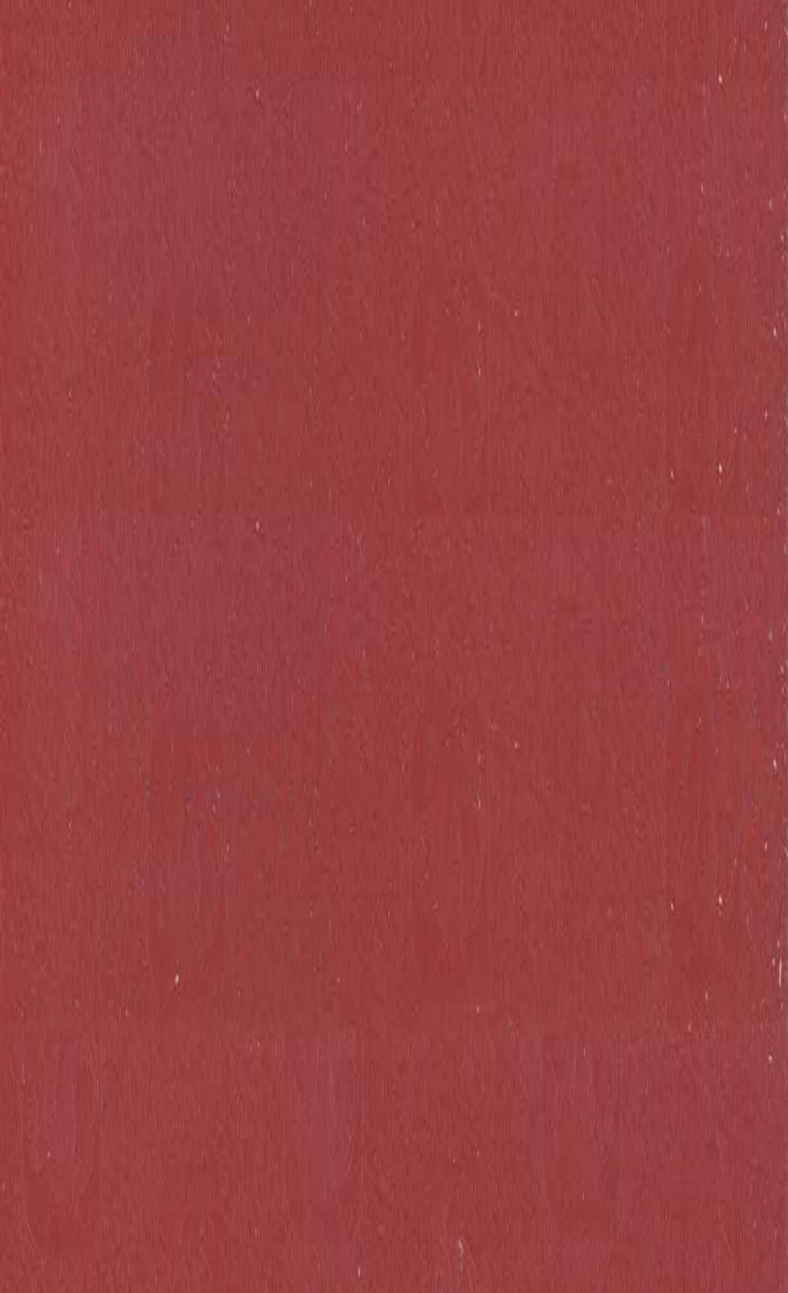
発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三三 振替東京三十一壱三〇八

電話東京三六五七二二大代表 〒102

¥640









KADOKAWA NOVELS

---

**喜劇悲奇劇**

**泡坂妻夫**

カバー絵・本文イラスト／山田維史



喜劇悲奇劇 目次

序章 今しも喜劇

1 豪雨後

2 期待を抱き

3 ウコン号

4 たんこぶ権太

5 唄子が答う

6 罪人秘密

11

18

36

51

64

78

91

13	死 <small>し</small> 因 <small>いん</small> 縊 <small>いし</small> 死 <small>し</small>	185
12	ウロタエタロウ	171
11	虎 <small>とら</small> らと	156
10	死 <small>し</small> んだ異 <small>い</small> 端 <small>たん</small> 児 <small>じ</small>	144
9	危 <small>き</small> 険 <small>けん</small> 劇 <small>げき</small>	135
8	拔 <small>ぬ</small> け穴 <small>あな</small> 開 <small>あ</small> けぬ	115
7	イザナミ読 <small>よ</small> みなさい	102

14 月並みな傷つきななきう

15 罪に満つつみにみ

16 どこまで真実まこと

17 まさか逆さまさか

18 予期した死去よきししきよ

19 大敵が来ていたたいてき

終章 奇劇も仕舞いきげきししま

198

210

222

230

245

257

271

## 序章 今しも喜劇

台風とうとう吹いた。

風がますます強くなる。空が悲鳴に似た息遣いをしてる。吹き千切れて飛んでいた黒雲は、豪雨ともに見えなくなつた。生ま暖かな白い雨があたりを包むと、空と海の境界も消えた。

波が高くなり、無気味に船を揺り動かす。船は一切の裝飾が取り払われていた。きらびやかな鮮黄色の船体も、今では重い朽葉色に見える。岸壁との衝突を避けるため、船は沖に出て錨を流し、暴風雨の中に、じつと息をひそめて、台風の通り過ぎるのを待つしかなかつた。

マリアナ群島近辺で発生した台風一三号は、数日後、中心気圧九五〇ミリバール、中心付近から半径二〇〇キロ以内では秒速三〇メートル以上の暴風雨、六〇〇

キロ以内では二五メートルの強風を持つ大型の勢力となつた。その年は、中緯度地方で吹く、上層の偏西風が弱かつたため、台風の進行速度も遅くなり、進路は迷走型だつた。台風は何度か氣象庁の予測を裏切つた後、勢力が衰えぬまま、速度を早め、関東地方の太平洋側に接近する、最悪のコースをとり始めた。

レーンバンド（降雨帯）は関東から西の太平洋側の地方に拡がり、前日から断続的な豪雨が降つた。台風は七月一日明け方に伊豆半島へ上陸。同じ日の午後四時過ぎには関東地方も暴風雨圏内に入り、東京で最大風速三二メートル、一時間に四五〇ミリの降雨を記録した。

デッキは川みたいになつてた。

船長の大館道夫と、機関技師の有田光次は、ゴム合羽に身を包み、横なぐりの雨の中を、ライフラインにすがりながら、デッキを一周したところだつた。船はよく整備されていて、破損した箇所は一つもなかつた。

船は一八〇〇年代に活躍した蒸気船を模した構造である。船尾に大きな水車を付けた船尾外輪船で、その

外輪が気がかりだったが、強い風雨にも充分堪えていることが判った。

船の点検を終え、上甲板に出て、最後に虎の檻へ廻つてみた。

頑丈な雨除けのシートがあつたが、檻の中は水びたしだった。四匹の虎は檻の隅にうずくまっけていて、光る目を二人に向けた。

「元氣のないのが一匹いると聞いたな」

と、大館が言った。

「トオトつて奴です。昨日から變に弱っているそうです」

機関技師の有田は、檻の奥を透かすように覗いた。

「こうして見ると、我我には虎の顔は全部同じに見えるますね」

虎は上海百戯団のものだ。中国では虎を使う芸を「虎術」というらしい。大館は調教師の劉雪山が、虎は猫よりも大人しいと言っていたのを思い出した。

「虎達は台風に出会ったことがあるだろうか？」

「さあ、どうでしょう。虎達はフランスのサーカス一

座の中で生まれたといえますから」

大館は檻の扉を調べた。がっしりした錠前に異状はなかった。大人しいといっても虎は猛獣だ。暴風雨に驚いて、檻を抜け出したりなどしては一大事だ。

二人は虎の檻を離れ上甲板の操舵室に戻った。

操舵室ではクルー（乗組員）の福井孝がラジオを聞いていた。

「どうやら、今が峠のようです。あと一時間もすれば、かなり静かになるでしょう」

と、福井が言った。大館は時計を見た。そのときの時刻は、五時二十分であった。

「明日は晴れますよ」

と、有田が言った。

「一、二日後でなくてよかった。明後日は初日だからな。初日に荒れたのでは幸先が悪い」

大館の言葉に、有田がうなずいた。

「芸能人たちは、かつぎ屋が多いものです」

「そりゃ、我我も同じだ」

「そうでした。他人のことは言えません」

大館と有田は濡れたゴム合羽を脱いで、ハンガーに掛けた。

「連中は部屋に籠り切りだらうか」

福井が答えた。

「劇場で稽古をしているグループもいるようですよ」

「熱心だな。全員、揃ったんだな」

「飛行機の遅れで、座長も大分気をもんでいたようですが、最後に奇術師がぎりぎりまで到着して、それで出演者が揃いました。ノーム レモンという、黒い髭を生やした外国人です」

「その男なら、座長の部屋の前ですれ違った。あれが奇術師か」

大劇場のバラエティショウは、アニメーション映画に始まり、ハワイアンショウ、危険術、コミック体技、虎術を中心とする上海百戯団の曲芸など、盛り沢山に編成されている。

「大入りにさせたいものだな」

と、大館が言った。

「台風が行ってしまえば、初日まで間違いなく晴天が

続きますよ。そうすれば、船に入り切れないほど、お客さんが押し掛けて来るに違いありません」

有田が太鼓判を押した。

「珍しい興行ですから、新聞やテレビ、方方で取り上げられているでしょう。不入りなんてことは考えられませんね。前夜祭と初日にも、テレビが取材に来る予定になっています」

天井近くのスピーカーから、トランペットの音が響いてきた。スピーカーは舞台に連絡されていて、舞台の進行状態が判るのである。

トランペットにギターが加わり、更にドラムやサクスの音も聞こえてきた。ハワイアンショウの稽古が始まるところらしい。バンドは「ランベ健治とブルーバーズ」、ダンスは「ヘスターレッツ」というハワイの女性ダンサー達だった。

元気のよいダンサーの掛け声が聞こえたとき、電話器が鳴った。

福井がすぐ受話器を取り上げ、大館の方を見た。

「船長、座長からです」

大館は差し出された受話器を受け取った。

「はい、大館です——」

だが、受話器からは変な雑音が聞こえるだけだ。

「変だな？」

「さっきもそうでした。船の内線電話の調子が悪そうですね。受話器を置いて待っていて下さい。また掛かって来ますよ」

と福井が言った。大館はその通りにした。すると、福井の言った通りベルが鳴った。

大館は受話器を受け取った。響きのよい、床間亭馬琴しょうまぎんの音が聞こえた。

「ちよつと話があるんだが、私の部屋へ来てくれないかね」

「どんなことでしょう」

「ちや、部屋で話す」

馬琴はそれだけ言うと、電話を切った。

「ちよつと座長の部屋に行つて来る」

大館は有田と福井にそう言つて、部屋を出た。

大館は船員用の昇降階段を降りた。

操舵室の下には無線室と医務室がある。その下は食堂の調理室で、デッキに出ることができる。更に階段を降りたところが廊下で、階段の傍に馬琴の部屋がある。船首の方は一般の娯楽室やカクテルラウンジ、クラブに通じている。船尾の方は機関室で、その横を進むと、劇場の楽屋に登る階段があり階段の向う側には、劇場関係者たちの船室が並んでいる。

大館が階段を降りると、馬琴はもう自分の部屋の前に出ていた。

「座長、何か？」

「うん、出演者の船室に、何か起こつたらいいんだ。

これから、行つてみる」

馬琴は先に立つて歩き出した。

機関室の横の通路は狭く、一人一人がやっと通れるほどだ。その上、暗く、暑く。

機関室を過ぎたところに階段があり、登ると舞台の楽屋裏に出る。降りると船艙だ。

馬琴は階段に出たところで、立ち止まった。

廊下は更に船尾の方へ続き、両側には船室が並んで



いて、一番奥が共同の湯沸室とシャワー室になっている。暗い廊下に何人かの人影が見える。

「私の部屋に電話を掛けたのは？」

馬琴は人人を見渡した。

太い横縞のシャツに短い吊りズボンの衣装が、たんこぶ権太だ。その向うにドクター瀬川とイザナギが立っている。こちらに背を向けている肥った背中は、イザナギの妻のイザナミに違いない。全員が一番手前にある右側のドアに視線を向けていて、八字髭の劉雪山がそのドアを叩いているところだった。

「僕です」

と、道化師のたんこぶ権太が答えた。

「この部屋で大きな音がしたんです。ドアの前にいたイザナミさんが、人の唸り声を聞いたという……」

「誰の部屋です？」

「ノームレモンの部屋だ」

ノームレモンは最後に乗船した奇術師だった。

馬琴はレモンの部屋に近寄った。大館も馬琴に従った。雪山がドアに耳を当てた。

「……確かに、レモンさんらしい声がします」

と、雪山が言った。

「病気か？」

「マスターキイを使ったらどうでしょう」

と、大館が言った。

「キイは唄子さんが事務長のところへ取りに行っているんですがね。遅いな。どうしたんだろう」と、権太が言った。

「やむを得ない。ドアを毀そう」

馬琴が雪山に指示した。

雪山の大きな身体がドアに体当たりした。二度、三度、身体を打ち付けると、木製のドアは、めりめりと言を立てて、最後には、内側に突き飛ばされた。

「あ……」

部屋の中を覗いた雪山が、たじたじと後ずさりした。

「レモンさん……」

ぽっかりと開いたドアに、人の姿が現われた。部屋の明りを背にしているので、顔の表情は判らない。その姿は今にも崩れ落ちそうな足取りだった。